

神奈川農経研 葉根菜試験成績書 No.18 (1987.3)

1. 研究課題名 ルバーブの栽培法確立試験
(3) シャ光資材利用による圃場軟化法試験
2. 担当者 成松 次郎
3. 目的 反射性フィルム等のシャ光資材を利用し、圃場栽培で軟化葉を得る方法を開発する。
4. 試験研究方法
 - (1) 品種 'マイヤッツ・ビクトリア'
 - (2) 軟化方法
 - ア. 供試個体 1985年4月2日には種し、養成した株を使用した。
 - イ. 栽植方法 条間90cm 株間45cm
 - ウ. シャ光方法 シャ光資材を、ほう芽前の1986年3月5日にトンネル被覆し、4月30日までシャ光した。
 - (3) 試験区
 - a. 反射性フィルム(シルバーポリトウ厚0.07mm、幅185cm)
 - b. 黒色ポリフィルム(マルチ用フィルム厚0.02mm、幅185cm)
 - c. 対 照 (露地)
 - (4) 試験区の大きさ 1区10㎡2反復
 - (5) 調査法 ほぼ5日ごとに葉柄長30cm以上に達した葉を収穫し、本数と葉柄重を記録した。
5. 結果の概要・要約
 - (1) ほう芽は全区とも、3月中旬より始まった。ほう芽の伸長は反射性フィルムが早く、次いで黒色ポリフィルムであり、対照区は遅かった。したがって、収穫もこの順にできた。
 - (2) 収量は、軟化栽培期間では反射性フィルムが多く、黒色ポリフィルムが少なかった。(第1表)。これは、反射性フィルムが、低温時において保温性が優れたことによる初期収量の差であると思われた(第2表)。
 - (3) 葉柄色は、初期収穫では反射性フィルムが赤色が鮮明であったが、黒色ポリフィルムは、シャ光が不十分(シャ光率96%)であったため、緑色が発現した。後期収穫の葉柄は、細くまた着色は悪かった。これは、日中のトンネル内が高温になることも原因と考えられた。
 - (4) トンネル除去後、約1ヶ月で収穫が再開できたものの、その後の普通栽培での収量は少なかった。
 - (5) 対照区では、4月26日から7月1日まで収穫でき、合計収量はシャ光資材区の2倍以上であった。全区とも7月上旬には、分けつが多く又葉柄が細くなる等の品質劣化が認められた。
 - (6) 以上のことから、シャ光資材は完全にシャ光できる反射性フィルムを使い、軟化終了後は、収穫を打ち切り、株の養成に努めると良いと思われた。さらに、トンネル被覆は早目に行い、トンネル内気温が上り過ぎない時期に収穫を終える作期とするのが適当と推察された。